

# 犯罪文学研究

小酒井不木



信

**長山靖生**（ながやますお） 1962年日立市生まれ。歯学博士。鶴見大学歯学部研究員。共著に『新青年読本』（作品社）、『小栗虫太郎ワンダーランド』（沖積舎）などがある。

**クライム・ブックス**

**犯罪文学研究**

1991年9月30日初版第1刷発行

著者 小酒井不木

装訂 中島かほる

発行者 割田剛雄

発行所 国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18

電話 03-3917-8287

振替 東京5-65209

印刷 ㈱キャップス+セイユウ写真印刷株式会社

製本 田中製本印刷株式会社

ISBN4-336-03294-7

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

# 犯罪文学研究

小酒井不木



錦盛堂

国書刊行会 定価2800円

[本体2718円]

ISBN4-336-03294-7

C0095 P2800E

# 犯罪文学研究

小酒井不木



国書刊行会



犯罪文学研究 目次

# 犯罪文学研究

はしがき

日本の犯罪文学

桜陰、鎌倉、藤陰の三比事

探偵小説としての三比事

三比事に書かれた探偵方法

三比事に書かれた特種の犯罪方法

三比事に書かれた犯罪心理

詐欺・竊盗を取り扱った文学（昼夜用心記と世間用心記）

両用心記の比較

両用心記に書かれた詐欺方法

曲亭馬琴の「青砥藤綱摸稜案」

青砥藤綱の裁判に対する態度

「摸稜案」の最初の物語

暗号解読

「摸稜案」に書かれた女性の犯罪心理

犯罪文学と怪異小説

江戸時代怪異小説

主題的怪異を取り扱った物語

二

一三

一六

一八

二六

三〇

三六

四〇

四四

四八

五二

五七

六二

六七

七二

七六

八〇

八四

八八

ラフカチオ・ハーンの翻訳

古今奇談英草紙

浅井了意と上田秋成

御伽婢子と雨月物語の文章

御伽婢子と雨月物語の内容

近松巢林子とシエクスピア

「マクベス」の研究

黙阿弥の悪人

\*

犯罪者のジェーキール・ハイド性

モリアーチャー教授

探偵の元祖ヴィドック

科学的研究と探偵小説

探偵小説管見

探偵小説の将来

江戸川氏と私

妖婆の鍋

二二

二四

二九

二四

二二

二五

二五

一八三

101

二四

二五

三四

二四

二五

二〇

二六

怪物の出産

二九五

「ペスト」小史

二九九

デ・フォ어의「倫敦疫病日誌」

三〇五

エーンズウォースの「旧セント・ポールス寺院」

三一

サムエル・ピープスの日誌その他

三二六

小酒井不木——横断する知性

長山靖生

三三一

収録作品解題

三三四

犯罪文学研究



犯罪文学研究



## はしがき

文学に現われた犯罪又は犯罪者の研究はかなり古くから行われている。古いと言つても、犯罪学そのものが比較的新しい学問であつて、犯罪学らしい犯罪学の発達したのは、所謂、犯罪人類学の開祖たるロムプロゾー以後のことであるから、まだ凡そ六七十年来にしかならず、従つて文学にあらわれた犯罪又は犯罪者の研究が科学的に試みられるようになったのも、五六十年來のことである。

實際、文学に描かれた犯罪者を科学的に研究した最初の有名な著述は、ロムプロゾーの高弟で、犯罪社会学を開いたエンリコ・フェリの「文芸に於ける犯罪者」であつて、これは一八九二年ピサで講演した所を補つて一冊の書物としたものである。この中にはシェクスピアの戯曲、「マクベス」、「ハムレット」、「オセロ」を始め、シルレルの「群盜」、ユーゴーの「死刑囚の最後の日」、ゾラの「テレーズ・ラカン」その他、及び、イブセン、トルストイ、ドストイエフスキー、ダヌンチオ等の作品が研究され、なおガポリオーやサルドウーの探偵小説まで研究されてある。

フェリのこの研究の要点は、フェリの「犯罪者の分類」を文学的作物によつて証明しようとした所にある。フェリは犯罪者を五種類に分つた。即ち一、狂的犯罪者、二、先天的犯罪者、三、常習性犯罪者、四、偶発性犯罪者、五、情熱性犯罪者がこれであつて、彼は文学に描かれたところの犯罪者も畢竟この五種以外のものはないことを指摘し、それと同時に「犯罪人類学」は、犯罪人類学を知らな

かつた文豪たちによつて、知らず知らずに理解されておつたということを論じている。

フエリ以後は、コーラー、ゴル等幾多の犯罪学者によつて、部分的に文学の犯罪学的研究が行われなければ、最も徹底的な研究をしたのはドイツのエーリッヒ・ウルフェンである。ウルフェンはフエリとちがつて、主として犯罪心理学の立場から、文学にあらわれた犯罪者を研究し、その著「シエクスピアの大犯罪者」と「ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲」は極めて名高いものである。前者にはマクベス、オセロ、リチャード三世の性格と犯罪との関係が遺憾なく説明され、後者にはハウプトマンの戯曲十種に就て、深い犯罪心理学的研究が試みられてある。

犯罪の研究も詮じつめて見れば「人間」研究の一部分である。そして人間をよく知るためには「科学」ばかりでは不十分である。「科学」は主として、多数の材料をあつめて、そのうちから共通な点を帰納しようとするのであるが、そればかりによつて人間研究を完うすることが出来ると思つては間違ひである。だから偉大なる科学者は、必ずしも、人間をよく知つている人（即ちドイツ語で所謂「メンシエン・ケンネル」でない。否、「メンシエン・ケンネル」は、古来、むしろ偉大なる文豪に多かった。従つてそれ等文豪たちの作品には、科学者達の普通気付かぬ人間の性質が描かれてある。ここに於て文学の科学的研究の必要が起つてくるのであつて、こういう立場から、「文学の犯罪心理学的研究」を試みたのがウルフェンである。その著「シエクスピアの大犯罪者」一巻は、むしろシエクスピアが如何に人間をよく知つていたかを証明したものといつた方が適當であつて、「文学の犯罪学的研究の価値」を説いたものと見ても差支ない。例えば軌近明かにされた「不具と犯罪性」との関係は「リチャード三世」の中に遺憾なく描かれ、「癲癩と犯罪性」との関係は「マクベス」の中に説き尽されている。だから優れた文学的作品の研究は犯罪の科学的研究の先駆たり得る見込さえあるのだ

ある。

さて、犯罪に関する文学といえはその範囲は極めて広い。善と悪との葛藤を描いた文学はある意味に於ては、悉く犯罪文学crimineliteratureと言つても差支ない。西洋ではホーマーの二大詩篇も見様によつては一つの犯罪文学である。然しながら、犯罪を描いた文学が、犯罪文学として、特に人々に興味を与えるようになったのは、犯罪が如何に探偵されて行くかということが描かれるようになってからのこと、即ち所謂探偵小説なるものが起つてからのことである。西洋の探偵小説の鼻祖は通常エドガー・アラン・ポオとされているから、所謂犯罪文学の勃興は第十九世紀の半ば以後のことである。

チャールズ・ホーンはその著「小説の技巧」の中に、探偵小説を「技巧の小説」の一種と見做し、その特徴は、構想が故意に逆に示されてあつて、読者は自分自身の機智を働かして、謎を解く努力をし、探偵の仲間入りをし得る所にあると言つているが、この点がやがて読者の興味の中心となることは言う迄もないことである。又、必ずしも構想が逆に示されていなくても、犯罪が一步一步わかつて行く経路の描かれてあるものは同様の興味を与えるものであつて、ドストイェフスキーの「罪と罰」や「カラマゾフ兄弟」の面白味は、その探偵味をたつぷり含んだところにあるといつても、恐らく誰も異存はあるまいと思う。

近頃では「探偵小説」なる名称が広い意味に用いられ、ホーンの所謂技巧の小説（恐怖、密謀、探偵、ミステリーを取り扱つたもの）を始め、ある種の冒険小説をも含ませらるるに至つたので、探偵小説は必ずしも犯罪文学ではなくなつたけれど、やはり探偵小説の名の示すとおり、犯罪の探偵を取り扱つたものが、数に於ては一ばん多いようである。これはいうまでもなく、人々が犯罪というものに一種の魅力を感じるためである。このことに就ては拙著「殺人論」に述べたことであるから、ここ